

死者の声はどう届くのか 『埋葬と亡霊』その後 (中)

| | |
|-----|---|
| 著者 | 森 茂起 |
| 雑誌名 | 心の危機と臨床の知 |
| 巻 | 21 |
| ページ | 29-48 |
| 発行年 | 2020-03-20 |
| URL | http://doi.org/10.14990/00003545 |

死者の声はどう届くのか

——『埋葬と亡霊』その後（中）¹

森 茂起

(3) 埋葬室と解離

本稿の目的は、ニコラ・アブラハムとマリア・トロークが『狼男の言語標本⁽²⁾』（以下『言語標本』）において用いた「埋葬室 crypte⁽³⁾」概念の吟味——『言語標本』に先立つ理論的展開と同書の成立過程も含めたそれ——を行うことである。それによって、『言語標本』に寄せた FORS と題する長大な序文で crypte について論じたデリダとの接点、あるいは両者の異同への何らかの理解が得られるはずである。しかしその作業に取り掛かる前に、筆者が関心を持ち、本論が扱おうとしている臨床的問題を今一度明確にしておくことにする。前節までを發表してから四年が経過しており、本論だけに接する読者もあることを考えると、筆者の問題意識を先に提示しておかなければ、精神分析における学説史的検証とのみ受け取られ、臨床的意義

が見えない恐れがあるからである。

まず、事例を挙げることから始めよう⁽⁴⁾。

分析治療に訪れたある若い女性は、心理症状に悩まされていたが、病因の探索のために個人史をたどる中で、祖父の若い頃の人生をまったく知らないことに行き当たった。それは祖父が若き日について語ったことがなく、それを示す写真等も見当たらないためであった。治療者の勧めによって、患者は存命であった祖父に繰り返し問いかけた。そしてついに祖父は、戦時中に軍の処刑人であったことを打ち明けた。クライエントにとって衝撃的な事実であったが、他方でそれは、戦後の職業選択を含む祖父の人生、それと絡む自身の人生についての疑問が氷解する腑に落ちる内容であった。そしてそれ以後症状は消失した。

次は海外の例である。ホロコーストサバイバー第二世代の患者が、交通事故をしばしば起こすことを主訴として治療者を訪れた。交通事故は交差点で右を見ることができないために発生していた。彼には右を見ることができない理由が思い当たらなかった。この事例では、子ども時代にホロコーストを経験した父親の経験がまったく語られていないことが明らかとなり、治療者に勧められて男性は父親に繰り返し尋ねた。ついに話された体験——内容からして父親のトラウマ体験の核を成していると思われるもの——は、移送された家族が強制収容所に到着した時の出来事であった。指差して犠牲者を選別する親衛隊将校

に向かって行列が進む中で、先に進んだ家族全員が右側に分類されたのを子どもであった父親は見た。そしてそれが死を意味することを理解した。離れた家族を見ることで自身もそちらのグループに分別される恐怖から、父親は決して右を見ないようにした。そしてサバイバーとなったのである。この話を父親から聞いてから男性は右を見ることができるようになった⁽⁵⁾。

このように、残酷な行為に及んだ、あるいは残酷な状況に巻き込まれた親を持つ子どもが、その事実をまったく知らないまま、明らかにその事実に関係する症状を発生させる例がある。

親あるいは祖父母の世代の外傷体験⁽⁶⁾が、まったく伝えられないまま、後の世代の中に——アブラハムとトロークの用語を用いるなら——「埋葬室 tripe」を生み出し、症状を発生させるのである。実はこれらの例、特に後者は、狼男についてアブラハムとトロークが行なった分析の範囲を超えている。なぜなら狼男のように過去の事実を知られないように暗号化された埋葬語ではなく、事実と直接関係づけられる症状を生み出しているからである。しかし、そのメカニズムについては不明な部分が多いものの、経験的に「埋葬室」の概念で記述できる現象があること、背後の事実が明かされることによって腑に落ち、そして症状形成が消失する現象があることを確認しておきたい⁽⁷⁾。

こうした問題、個人が経験していない過去の事象が、個人の

内部に埋葬室を形成すること、言い換えると、「かつて一度も現前しなかったものが心的効果を生む⁽⁸⁾」ことへの注目がアブラハムとトロークの仕事の特徴づけられている。狼男の症例の場合、その効果を生んだものは、父親による姉への性暴力という外傷、つまり狼男自身が経験したのではない外傷である。その体験が姉に埋葬室を生み、それが弟の狼男に作用する。アブラハムとトロークはこの問題を、後に、「他者の tripe からやってくる『亡霊』(fantome)の現象⁽⁹⁾」として捉えるようになる。

こうした問題を現在の臨床用語で記述すればどうなるであろうか。すでに指摘し⁽¹⁰⁾、またここでも差し当たり参照枠としておきたいのは、「解離」の概念である。アブラハムとトロークの取り組みや、その背景をなすシャーンドル・フェレンツイの試みの特質は、外傷に焦点を当てたこととともに、精神分析が理解の枠組みを持たなかった解離を理解しようとしたことにある。

解離症状は、「隔離」「区画化」といった下位カテゴリーに分けて整理されており⁽¹¹⁾、「隔離」には、自分のことではないように体験される離人感や、自身の体験を外から眺める体外離脱体験が含まれる。自身の体験から直接性が失われ、意識との間に距離が生じる現象である。そうした症状の起源は、外傷的出来事が発生したときに防衛手段として起動される感覚や意識の

姿容にある。

「区画化」のカテゴリには、自己の内部に意識のアクセスが困難な部分が存在する健忘や、意識の機能を含む人格自体が複数に分割される人格交代が含まれる。アブラハムとトロークが提示する埋葬室概念は、自己のある部分に、接近不可能な領域があるという意味で、この区画化に対応している。区画化を生じる契機としては、特に人格交代については、ほとんどの場合に性的虐待の既往があることが指摘されている¹²⁾。反復的、長期的であること、恐怖だけではなく家族内力動の歪みを伴い、罪悪感、恥などの対人感情が関わることを特徴とする事態が区画化を促進する。そうした事態は、家族集団内で隠され、地域社会から大きな共同体にまで至る大集団の中でも隠される。つまりは必ずある程度の秘密がそこに関わっている。

単回性の出来事を「隔離」に、反復的持続的事態を「区画化」に対応させ、恐怖を前者に秘密を後者に結びつけるこの理解は、実のところ単純化した理解である。反復的な出来事にも恐怖はあり、単回性の出来事にも秘密が関わることは多い¹³⁾。「埋葬室」の概念が、現代の解離理解における「区画化」と対応しながら、個人史の中の秘密とともに発生する区画化から、家族史の中の秘密とともに発生する区画化へ拡張するものであることを示すための単純化であった。

狼男の症例の場合は、父親による姉への性的侵犯がそれであっ

た。たしかに、家族内に発生する性的な侵犯は「秘密」を構成しやすい。「性的虐待」「身体的虐待」「心理的虐待」「ネグレクト」という子ども虐待（不適切な養育）のカテゴリの中で、性虐待は、「沈黙の虐待」と呼ばれることもあるように、最も隠されやすく、暗数の多い虐待と言われている¹⁴⁾。しかし、秘密は性的カテゴリにのみ関係づけられるわけではない。冒頭に紹介した例では、処刑という行為が秘密を構成していた。ホロコーストの例では、家族を見ないことで生き延びた行為であった。こうした多様な秘密が共有する性質は、ある限界を超えた「侵犯」なのであろう。

しかし、やや議論が先走りすぎた。アブラハムとトロークの扱う問題群が、現在の臨床場面でも重要であることを踏まえた上で、アブラハムとトロークの議論を——デリダとの相互関係も含め——たどる作業に移りたい。

(4) 埋葬室 *crypte* の発生史¹⁵⁾

その一 『*丹鐘*』 *ごおけの crypte*

ここで「発生史」というタイトルは二つのものに向けられている。一つは埋葬室が個人に発生するその歴史であり、もう一つは、アブラハムとトロークの仕事、あるいはデリダの仕事の中で、埋葬室の概念が生まれ、発展する歴史である。

前稿で述べたように、アブラハムとトロークの仕事、そしてデリダの仕事は、hauntology（憑在論¹⁶）の、「独立し、相互に関係し、ある程度は共約不可能な二つの起源」と言われる。そして当然のことながら、その起源の中核に、それぞれが用いる「埋葬室」および「亡霊」の概念がある。したがって、発生史を理解するには、両者にとつての「埋葬室」あるいは「亡霊」の概念が、「独立し」、「相互に関係し」、「共約不可能」な形で展開する過程を確認せねばならない。

デリダによる crypte の概念の使用については、港道がすでに時系列的整理を行っているので参照しておこう¹⁷。まず、一九七四年に刊行された『弔鐘^{グッラ}』において、デリダが crypte の概念を幾度も使っていることがその整理の出発点である。その刊行が、アブラハムとトロークの『言語標本』に二年先立つとともに、『言語標本』の第一部に収録された論考、「狼男の魔法の言葉」（以下、『魔法の言葉』）の発表の三年後であることを確認しておこう。ここにすでに両者がある程度独立しながら相互に関係する事情がある。そして事態を一層複雑化するものは、crypte の語の使用とアブラハムとトロークの仕事に関するデリダの発言である。しばらく後、アブラハムがすでにこの世にならぬ一九八〇年に、ピエール・マドールが、『弔鐘^{グッラ}』におけるデリダの「crypte」の使用について指摘した¹⁸。それに対してデリダはこう発言した。「あなたの話を伺っていて、『弔鐘^{グッラ}』の中

に「crypte」が頻繁に出てくるのに驚きました」と。デリダは、この語の頻繁な使用を意図していなかったことになる。

ではデリダはこの語をどのような意味で用いたのだろうか。港道は『弔鐘^{グッラ}』の次の箇所を引用する。

Crypte——こう言われたであろうものの、超越論的なものや抑圧されたものの、思惟されざるものや排除されたもの——は、自らがそこに属さぬ地盤を組織する。

思弁的弁証法が言わんとするのは、crypte もなお体系へと体内化されうることだ。

超越論的なもの、抑圧されたもの、思惟されざるもの、排除されたものであり、「自らそこに属さぬ地盤」だが体系の中に体内化されるもの、そうしたものを彼は crypte と呼ぶ。単に排除され放逐されるのではなく、それは体内化という過程を経て「自ら」の内部ではない内部の場所に存在する。

この crypte の語の使用が、アブラハムとトロークの仕事とどれほど関係していたのかが問題である。デリダとアブラハムは、すでに一九五九年に哲学の世界で出会っており、友情を結んでいた。アブラハムの仕事が精神分析の領域に展開して以降の一九六〇年代後半から、デリダはラカンとフロイトを読み、その先に『弔鐘^{グッラ}』が書かれたので、アブラハムの仕事も視野に

入っていたであろう。後に詳しく見る通り、それまでにアブラムとトロークは *cryste* の語を用いた論考をすでに発表し、一九七一年には『魔法の言葉』を発表していた。したがって、デリダは、それらから何らかの影響を受けながら *cryste* の語の使用に至ったと考えたくなる。しかし彼自身は、マドールの発表を受けた討論において、アブラムとトロークの仕事を知っていたが、それ以上ではなかったと、直接の影響関係を否定している⁽¹⁹⁾。

その二 アブラムとトロークの *cryste*

では、デリダが「知っていた」アブラムとトロークの仕事とは何であろうか。以下に、二人の一九七四年までの仕事をたどってみよう。幸いなことに、その作業のために私たちに、二人の重要な著作を網羅した『表皮と核』が与えられている⁽²⁰⁾。さらにありがたいことに、埋葬室 *cryste* に関する論考は、その第四部「自我」の中のクリプト…いくつかの新しいメタ心理学的な展望」に、発表順に収録されている。

第四部の冒頭を飾るのは、「喪の病と妙な屍体のファンタスム」と題する、トローク単独による一九六八年の論考である。議論は、一九二二年にベルリンのカール・アブラムがフロイトに対して向けた問いかけへの注目から始まる。それは「喪の時期のすぐ後に、リビドーの増大が見られる患者が多い⁽²¹⁾」

という彼の観察に対するフロイトの見解を求める問いかけ、あるいはフロイトにも同様の観察経験があるかという問いかけであった。アブラムは、その増大が「妊娠にまで進むこともある」と言う。トロークは、往復書簡等から、フロイトによってあるいはそのフロイトの反応の影響を受けたアブラムによって、この観察へのさらなる検討が回避されてしまった経過をたどる。

トロークは、同様の現象が見られた自身の症例——母親の遺体を前にして肉体的興奮を感じたという赤裸々な告白——の観察から、喪に際するリビドーの増大というこの現象をあらためて考察の対象とする。その際彼女が行う理論的検討の一つが、体内化の概念の明確化であり、しばしば体内化と混同されている「取り入れ」概念のフェレンツイに従った再検討である。

フェレンツイによれば、「取り入れ⁽²²⁾」には次の三つの要点が含まれる。(1) 自体愛的関心の拡張、(2) 抑圧の解除による自我の拡大、(3) 対象の「自我」への封入、である。そしてこれらの総合は、原初的な自体愛を「対象に対するものとすること」を意味する。したがって、フェレンツイにとつてあらゆる対象愛は「取り入れ」である。当然のことながら、この語は神経症者においても健康者においても共通するメカニズムを指し示している。

これを確認した上で、トロークはそれと厳密に区別して「体

「内化 corporation」を定義する²³。「失われた快感と失敗に終わった取り込みを補償するものとして、人は禁止された対象を自己の内部に現実には据えつけようとする²⁴」こと、それが「体内化」である。ここで重要なのは、ここで「ファンタズム(幻想)²⁵」と呼ばれている幻覚的な作用、「対象の体内化はイマーゴ的絆を作り出す²⁶」とトロークが言う作用である。

これは具体的にどのような出来事を指し示しているのだろうか。ここで、私の知る一例を示したい。こうした例が現在のアクチュアルな問題でもあることを示すためである。ある子どもがいわゆる愛情剥奪、今日の言葉ではネグレクトの状況にあった。ある日友達の家を訪ねたとき、友達の母親が示した経験したことのない優しさ——自身の母親からは想像もできない優しさ——に体が痺れるような衝撃を受ける。そしてその母親がキツチンに立っている姿を見たときの足の白い靴下の映像が、優しさの衝撃と強く結びついた。後年彼は白い靴下へのフェティッシュな欲望に駆られるようになった²⁷。

こうした事態をトロークは、自我の豊かさをもたらす取り入れではなく、自我の活動の脆弱化として、あるイマーゴ的絆による生活の支配をもたらす「体内化」として理解する。「体内化された対象は、記念碑となつて、このような欲望が取り込みから追放された場所、日付け、状況の数々を刻印する」と。欲望は、自我の中に取り入れられ、自我を豊かにするかわりに、

どこかに追放され、自我との関係を結ぶことが決してできなくなる。

今述べた例は、喪と関係する例、すなわち死別を契機に発生する体内化の例ではない。しかし、本来母親に向けられてしかるべき強い欲望の存在があり、それが拒否され、あるいは拒否される以前に先読みして留められてきた経験が背後にある。つまりその意味での喪失体験である。そこに訪れた本来の道筋とは異なる欲望の奔流が「体内化」をもたらしたとすれば、一つの喪失に伴う「体内化」と理解できるだろう。

さてこうした「体内化」の理解の上に、トロークはその治療を次のように描写する。「自己」虐待の苦痛に導かれて、われわれは埋葬 *entere* された欲望が横たわっている地下納骨所 *Caveau* (死者の名前が長い間読み取れないままの「ここに誰かが眠る」というあの墓碑銘) の追跡作業を行う²⁸」と。「埋葬」「地下納骨所」という表象がはじめて登場する箇所である。

後の *cycle* 理論へのとば口とも言えるが、他方で、ここでの使用は、喪のプロセスに限定されたものである。こうしたイマーゴは、たとえば喪の病において繰り返し現れる「妙なる死体」の夢の経験と直接結びついており、抽象化された術語としての *cycle* 概念には至っていない。また、いっそう本質的な差異が両者にはある。つまり、「かつて一度も現前しなかつた、ものが心的効果を生む」現象への注目がまだここには存在しな

い。そこに注目するに至るには、狼男の症例の分析作業を待たねばならない。

トロークがこの論考を発表したのち、アブラハムとトロークは、いずれの時点でか⁽²⁹⁾、狼男の症例に注目し、分析を開始した。その分析は、「crypte とは何か」と問いかけるデリダの FORS を含む『言語標本』(一九七二)にまとめられることになる。しかし、のちに述べるように、一九七一年に公表されるその作業では、crypte という語が術語として用いられることはない。時期的にも内容的にも明らかに狼男の分析を通して得られたと思われる crypte 概念は、むしろ、同時期に並行して発表されていった——狼男の症例を直接扱わない——他の論文の中で練られていく⁽³⁰⁾。

まず、一九七一年の「〈現実〉の局所構造⁽³¹⁾」である。ブラウンシュバイクの『精神分析と現実』への論評として書かれた短文だが、重要な理論的展開を示している。ここでの主題は、「秘密」として定義されるもの⁽³²⁾としての「現実」である。狼男においてそうであったように、「巧みに隠しておくべき現実」が問題となる。そして論の早い段階で、その秘密を持つ者を、「クリプト保持者、cryptophone」[埋葬室を保持するもの]⁽³³⁾と強調符つきで名指す。そのしばらく後に、次のように定義的記述が登場する。

局所構造においては、このクリプト crypte は特定の場所に対応している。それは力動的〈無意識〉でもないし取り込みを行う〈自我〉でもない。むしろ両者の間の飛び地のようなもので、〈自我〉の内奥そのものに住まう一種の人工的〈無意識〉なのである。このような地下納骨所 caveau の存在は、力動的な〈無意識〉の半透明的な仕切壁をふさぐ効果を持つ。

局所論的場所の概念としての crypte が初めて登場した箇所と思われる。「鍵のかかった地下納骨所 Le caveau, avec sa serrure⁽³⁴⁾」と「った「隠喩的」な表現も用いながら、その場所の名として crypte の語が定着する。そして、メタ心理学的観念としての〈現実〉を、「秘密」を伴って crypte に収められたもの、と定義する。

狼男の分析で行なった言葉への注目はここでも続いている。「問題なのはまさに、言葉^{パロール}なのだ」と主張され、その働きが——狼男の分析を下敷きにしていられると思われるがそうとは明示されずに——論じられる。しかし、論述全般を通じて、「埋葬する」言葉——『魔法の言葉』が主題とする「埋葬語 cryptonymie」——の働きよりは、埋葬されたその場所、そこに隠された〈現実〉に焦点が当てられる。ここでアブラハムとトロークは、埋葬室 crypte を鍵概念とする「秘密のメタ心理学⁽³⁵⁾」に導かれたことになる。

ここで注目したいのは、「喪」から「秘密」へ議論が拡張されたときに同時に現れる一つの主題、〈現実〉が秘密となるための要件、である。アブラハムとトロークにとってそれは、〈現実〉を構成する「法への冒瀆」である。秘密が発生するのは、父親による姉への性暴力のように、「冒瀆」がそこにあるからである。「喪」において体験される欲動の暴発のように、その場で主体から生まれる欲動が「罪」や「恥」の理由ではない。かつて外の力が犯した冒瀆が「罪」や「恥」となって、人から人へ——たとえば狼男の場合は父から姉へ、姉から弟へ——受け継がれる。

逆に言えば、アブラハムとトロークにとって、*crime* があることは、何らかの冒瀆があった印である。一人は言う。「地下納骨所 *caveau* が存在すると言いつことは現実、に出来事が起こったことを十分に証明している⁽³⁶⁾」と。問題になっているのは、フェレンツイの議論を受け継いだ、しかし当時精神分析用語としては使うことが憚られさえしていた「心的外傷」である。〈現実〉とは、「心的外傷の現実」であり⁽³⁷⁾、それと対決することが精神分析の仕事である。

この〈現実〉の局所論は、メタ心理学として他に類を見ないものである。具体的に言えば、冒頭に紹介したホロコーストのサバイバーの第二世代にとって、かつてある日ある時にあった「父親が右を見なかった」こととそうせざるを得なかった状況

がその〈現実〉であろう。その出来事はどこにも記録されておらず、歴史的事象としては消え去っている。しかし心理的作用として第二世代以降の心の何処かに残っていて、何らかの作用を及ぼし続けている。その意味で〈現実〉は心の審級であり、その何処かを指し示す言葉が *crime* である。

ここで、付け加えておかねばならないが、その〈現実〉が幻想ではなく、外的現実としての過去にあった出来事——の遺物——であることの傍証を、強制収容所の事実を記述してきた歴史学が提供していることも忘れてはならない⁽³⁸⁾。それは歴史学的に見て十分あり得る出来事なのである。その点、狼男の症例のように、父親による侵犯に関する外的情報がない場合はどうだろうか。アブラハムとトロークにとっては、*crime* があること自体が、それを生み出すだけの出来事があったことを確証している。そしてその内容は、狼男自身の言葉、埋葬語の分析、複数の分析家の手によって残された彼の人生に関する調査の総合によって再構成される。

この理論を巡って行うことができるであろうこれ以上の議論は別の機会に譲って先に進もう。ここで提案された、*crime* のメタ心理学をより精密にするため、アブラハムとトロークは、一九七二年に「喪あるいはメランコリー——取り込むこと——体内化すること⁽³⁹⁾」を発表する。以下に見るように、この論考では、*crime* 概念を踏まえて「喪」の主題と「心的外傷」の

主題の再統合が図られる。

議論のはじめに、「ファンタズム」の語を乳児期にまで遡って使用するクラインとの差異が指摘される。当時メラニー・クラインが展開していた、本能の表れとしての無意識的幻想（ファンタジー）理論との差異化という目的がこの論考にあり、「ファンタズム」という名称を、「局所構造の現状維持を目指すすべての表象、すべての信念、すべての身体状態⁴⁰」に限定する。クライン派の使用法が一般化したその後の展開から見ても、この定義はきわめて特異なもので、かつアブラハムとトロークの見方をすぐれて特徴付けている。

二人にとって「ファンタズム」は、「主体を傷つける」ことを回避して「世界を変える」方向の作用であり、「秘密のままに維持された局所構造に準拠する」。ファンタズムの背後には変化を迫る「現実」があり、その「現実」が、公然のものとして自我に取り込まれる代わりに「体内化」され、秘密のままに維持される。たとえば、狼男にとって、父親による姉への行為がその「現実」に当たり、狼男の「魔法の言葉」や夢の表象がファンタズムである。前論文に続き「外傷論」としてファンタズムを位置づけているのである。

「主体を傷つける」方向と「世界を変える」方向というこの二分法は、フェレンツイの外傷論と比較して整理しておく必要がある。なぜなら、フェレンツイが、最晩年の外傷論で、やは

り「自己を変える」方向（自己変容的 autoplatic）と「他者を変える方向」（他者変容的 altoplastic）という二分法を使っているからである⁴¹。そしてフェレンツイにとっては前者が外傷的な事態であり、一見ここで二分法と逆転している。

アブラハムとトロークによれば、ファンタズムによって現状維持が目指される場合が外傷的な状況であり、「取り入れ」が可能の場合、つまり主体の変容が起こる場合は非外傷的である。「主体を傷つける」恐れがある事態だからこそ、それを避けて「世界を変える」方向に向かう。フェレンツイによれば、外界からの圧倒的な暴力にさらされたとき、その作用を受けて分裂（解離に相当する）によって対処することが「自己変容的」であり、自己を守るために他者に働きかけることが「他者変容的」である。

しかし、すぐに分かるように、アブラハムとトロークが「現状維持」としているのは従前の「局所構造」であって、その結果「秘密のままに維持された局所構造」が発生するという意味では変化を被っている。フェレンツイであれば「自己変容的」と記述するところである。したがって、この逆転は「何を」維持するのかという視点の相違から起こった言葉上の問題であり、事象の理解に矛盾はないと思われる。相違があるとすれば、アブラハムとトロークが「秘密」の観点を新たに導入しているところである。フェレンツイの「分裂」あるいは「自己変容的」

な防衛は、自己が直接体験した外傷に対するものであって、分裂した自己の融合によって過去の体験の想起が可能と彼は考えていた。しかし、アブラハムとトロークの扱う秘密は、自身の中に残るあらゆる痕跡を集めてもそれと再構成することはできないものに拡張されている。それが crypte の概念を要求したのである。

さて、以上のように「ファンタスム」を定義した上でアブラハムとトロークが焦点を当てるのは、「体内化のファンタスム」である。ここに言う、「体内化」は一つのメカニズムとしてのそれではない。「対象を身体へ導き入れる⁽⁴²⁾」という形態を持つファンタスムであり、「口」という場所が主役を演じる。これを二人は、原光景、去勢、誘惑といった原ファンタスムとは別の特権的ファンタスムと位置づける。もちろんこれは二人が狼男に見出した事態——外傷から発生する「口がある語をはつきりと発音」できないという事態——の理論化である。つまり、物としての語の体内化の理論である。

このような、言葉の取り込みの挫折、言葉の体内化の発生を、アブラハムとトロークは次のように描写する。

問題なのはもっぱら、ナルシズムの欠くことのできない対象の突然の喪失であり、一方でこの喪失に関するコミュニケーションが禁じられているような場合である⁽⁴³⁾。

つまり、喪失という事態に「コミュニケーションが禁じられている」事態が重なるとき、言い換えれば秘密でなければならぬ事情が伴うときに、言葉の体内化が起こるのである。「口にすることができなかったような話」「思い出すことができなかったような光景」「流すことができなかったような涙」があるとき、「言葉にしえない喪は主体の内部に秘密の墓所を据え、喪失された対象物が再構成されて、「それ自身の局所構造を持った完璧な人物として、クリプト「埋葬室」の内部に生きて横たわる」⁽⁴⁴⁾。こうして、トロークがすでに論じていた「喪」の主題が、その後導入された「秘密」の主題と統合される。

以上の理論の提示の後、二人は、狼男の姉の自殺もまた、『魔法の言葉』で見出したタブー語 *tabou*（擦る）と関係するという解釈を提示する⁽⁴⁵⁾。父が姉を対象に起こした冒瀆によって、狼男にとって *tabou* がタブー語になり、多数の埋葬語を周辺に生み出したという解釈が『魔法の言葉』の基軸なのだが、同じ言葉が姉にも体内化され、一六年後に水銀（ロシア語で *rouge*）による自殺という行為を生んだと考えるのである。水銀を飲む行為は、体内化のファンタスムそのものの、これはアブラハムとトロークが用いた言葉でないが、いわば体現であった。

ここでの体内化は、父という自我理想の毀損をなかつたものにすることを目的とする。つまり、先に理論的に提示された

通り、自我理想の「現状維持」である。「体内化に由来するあらゆるファンタスム形成は、現実に生起して理想の対象に影響を与えた傷を——想像的なものの中で——修復しようとする(46)」のである。

この驚くべき解釈、しかし体内化が姉から弟に連鎖したという解釈からすれば一貫した解釈は、この論文で行なった理論構築の成果であるとともに、むしろ姉の死に関するこの考察を抽象化することによって先の理論構築が行われた可能性が高い。「魔法の言葉」の作業を行なって以来、狼男に関する考察がその構築を要求する形で理論が生まれてきたと思われるからである。

しかし、狼男に関する論考を『言語標本』に統合する際、姉の死に関するこの新たな解釈は収録されなかった。港道はこれを、解釈の紹介とともに、「なぜか素通りした」という表現で指摘している(47)。素通りの理由については後にもう一度考えることにし、ここではその事実だけを確認しておきたい。

デリダの『弔鐘^{グッ}』が刊行された一九七四年に近づいてきた。

ここまでで「埋葬室 crypte の発生史」の記述を終えても良いところである。しかし実は、まさにその刊行の年を挟んで、重要な展開がアブラハムとトロークの議論に生まれていた。そしてそれは、デリダとの影響関係にとっても重要な展開である。

つまり、crypte の概念の先に展開された「亡霊」(fantome) の

主題である。

「亡霊」に関しての初めてのまとまった論考は、一九七三年三月のバリ精神分析協会における発表、「失われた対象—自我クリプト内の同一化についての註釈⁽⁴⁸⁾」である。それに続いて、翌年の二月から、「メタ心理学的な亡霊」に関するセミナーが精神分析研究所で開始されている(49)。したがって、時系列としては『言語標本』に先立つその展開を、FORSを書く際にデリダが参照した可能性はある。しかし、crypte の書であって、「亡霊」の概念が登場しない『言語標本』に関わる両者の交流、影響関係を見るためには、「亡霊」への展開の前までを一応の区切りとしておく方が整理しやすい。

なお、アブラハムによる「亡霊」概念の展開は、一九七五年一二月の彼の死によって断ち切られ、以後はトローク一人の手に委ねられることになる。『表皮と核』第四部に収められている彼のセミナーノートも含め、「亡霊」に関する議論——それは本論全体にとって本質的な部分だが——をたどる作業は後に回し、ここでは、『言語標本』の成立過程と、その範囲での crypte の扱いを先に見ていこう。

その三『狼男の言語標本』の誕生

一九七三年のある時期までにアブラハムとトロークが行っていた狼男の症例の分析は、『魔法の言葉』(一九七二)で一旦終

わっていた。そこから『言語標本』（一九七六）の出版までには、同書の第二部、第四部にあたる仕事が進められなければならない。

二人が狼男を巡って「再びペンを執る⁽⁵⁾」に至ったのは、一九七四年一月二五日のシャーンドル・フェレンツィ生誕一〇〇周年祭での発表のためであった⁽⁵⁾。デリダの『弔鐘^{グッラ}』が公になる以前の仕事である。その作業は『魔法の言葉』の仕事を「狼の夢」に拡張したもので、『言語標本』の質を決定づける濃密な議論であるが、局所論的 *crypte* 理論について何らかの進展を示すものではない。実際、『言語標本』全体の印象からすると意外かもしれないが、そこに *crypte* の語は登場しない。一九七五年に論文化されたこの論考が、『言語標本』第二部となった。

それに続く過程、『言語標本』の第三部以降の執筆は、デリダの『弔鐘^{グッラ}』刊行以降に行われた。もちろん二人は、デリダが *crypte* の語を使用したことを知ったはずである。しかし、その後の部分にも、筆者の目から見る限り、デリダからの直接の影響を感じさせる部分は見当たらない⁽⁶⁾。

書籍としての完成までに行われなければならないなかったのは、序章および第三部、第四部の書き下ろし、デリダへの寄稿依頼である。追加された第三部の副タイトルには「埋葬室 *crypte* の永続性」、そのうち第5章にタイトル「隠蔽埋葬室 *crypte*」

が与えられた。タイトルに見る限り、今まで見てきたようなメタ心理学に基づいた局所としての *crypte* が主題になったように見える。

しかし、本文を辿ると、埋葬室 *crypte* の語が登場する箇所は驚くほど少ない。第三部は、第二部に続き、狼男の他の夢、つまり狼の夢以外の夢に対する、埋葬語 *cryptonym* に注目した分析であり、埋葬室の語は登場しない。第5章では、彼の生活史に関わる秘密（宝石の隠蔽）、鼻の頭の「黒にきび」へのこだわり、フロイトから受けた狼の夢に関する書簡による質問と返答などのエピソードが、それらに関わる埋葬語の分析とともに辿られる。フロイトからの質問とは、フロイトがランクから受けた攻撃、つまり狼が木に止まるスケッチは幼少期の夢ではなく面接室の壁に掲げられていたフロイトと五人の弟子たちの写真に由来する、という主張に対する反論のため、その夢を見た本人に証言を求めたものである。

「埋葬室」がはじめて登場するのは、さらに夢の分析が続く第6章の最終部分においてであり、「女家庭教師への埋葬室的 *cryptique* な同一化が働いている」という形容詞形での登場である。ここで「女家庭教師」は、狼男の幼少期の家庭教師であるとともに、第二の分析家、ブルンスウィックを表すと理解される。フロイトから分析を依頼された彼女を仲介したフロイトへの同一化があり、その事実には埋葬語の数々によって接近不可

能となっている事態、それを埋葬室的な同一化と呼ぶわけである。

一個の術語としての「埋葬室 crypte」の語がついに登場するのは、第三部の最終章である第7章の結論近くに至った箇所である。まず第5章のタイトルの「隠蔽埋葬室⁵³」が、それが「瓦解した」という文脈で登場した後しばらくして現われるその一文を引用しよう。

彼は、ただ享楽することを目的として、スキャンダルの言葉と、偽りの承認という身分とを、おのれの深い埋葬室の中に保ち続けることになる⁵⁴。

一つの身分が同一化の働きによって体内化され、自己の内部に位置付けられる。「深い」という場所の性質を表す形容詞とともに、局所論的な性質が明確化されている。

その後、第四部第8章が結論として置かれる⁵⁵。全体の編集が終わった時期に書かれたと思われる短いこの章は、「語が語る話の数々 あるいは韻とへ物」と題される。そして最後に、特殊な性質を帯びた狼男の語彙を集めた表「WOLF-MAN⁵⁶」の言語標本」が提示されて第四部を終える。したがって、第8章は、その多くの記述が、「語と意味」「話」^{パワール}、あるいは「韻」に当てられるが、同時に、この書全体ではじめてとも

言える、「埋葬室 crypte」の定義的記述を含んでいる。

第8章はまず、精神分析は、象徴という形で受け取られるものの「補完物」を見出し、それが何ものであるかを決定することを目指す聞き取りであると定義する。そして、「その謎があまりに厚くて単なる聞き取りによっては解読できないかのよう」な患者の言説が存在することを確認する。その解読困難は、語そのものに加えられた亀裂によるという気づきが「埋葬語」という発想の基盤である。その状況は、患者が持つ「自分が何とも知らないパズル、つまり組み立て方の様式も知らず断片の大部分も知らないピースからなるパズル」と表現される。言葉の象徴作用によって謎が形成されているのではなく、言葉というピース自体が断片化していることを意味する。その場合、断片を拾い集めてピースを再構成したのちにピースの組み合わせに進まねばならない。「破裂した象徴の諸々の亀裂線の数々」を辿る作業、つまり、狼男が用いる言葉に含まれる断片の再構成が必要であった。そして「この内一象徴的 (intra-symbolique) な表面の凹凸をわれわれは、「地下埋葬室の内壁」と呼んでいた」という記述が続く。

言葉の断片化の問題から crypte という空間的概念への繋ぎこそが、この書で本来必要でありながら、正面から行われなかった作業であり、それが crypte の語の使用を限定的にしてきた理由ではないか、と筆者は考えている。振り返ってみれば、狼

男から発想を得ながらも、先に見た諸論文における cryptic 概念の発展は、喪と同一化の主題をもう一つの源泉としてきた。「両源泉の統一が課題だったのである。」

最後にいよいよその繋ぎが行われる。本書で行われた埋葬語の分析、音素、意味、綴りの断片それぞれからの連想関係を辿る翻訳作業に触れて、アブラハムとトロークは、そのような変形が起ころには、「埋葬室^{クリプト}そのものの中の、明晰で反証する審級の現前⁵⁷」がなければならぬと言う。筆者なりに言い換えてみると、ある言葉がそのままの形では発せられてはならないことを命じる意識内の作用があり、それは無意識を通じてなされる通常の意味的変形ではない。二人の言葉で言えば、「gouik に施された諸々の擬装は、〈無意識〉の障壁を横切ってやって来るのではなく、〈自我〉の只中に走る分割線を横切って来る」のである。このような言葉の擬装を理解するためには、「代補的な仮説を立てるのが適切」として、次の定義的な仮説が与えられる。「まさに〈自我〉内部の埋葬室^{クリプト}の、割れた象徴の、分割の、あるいは別のイメージでは〈自我〉の中にある裂け目という仮説⁵⁸」である。「分割された〈自我〉の二元性」は、その片方を無意識内に追いやることができず。それは常に「目張り」をされた障壁の向こうにある。

この定義的記述によって、語から場所への繋ぎがさしあたりできたように見える。しかし、局所論に関するもう一つの課題

が次に扱われる。それは断片化やその連想関係だけでは説明できない現象である。その結論部を先に示そう。「埋葬語の現前は、埋葬室の存在を、〈自我〉の中の分割の存在を示しているが、同様に同じ語の別の運命をも指示しているのだ。別の運命〈無意識〉の中でフェティッシュ化である⁵⁹。」自我の分割という問題と、無意識内でのフェティッシュ化、この二つが併存すると言う。

この理解は、障壁の向こう側にある埋葬語を生み出したそもそもその享楽の語 *letet* の運命の考察から生じる。つまり、その語もまた、障壁の向こう側にあるのだが、埋葬語の数々と異なり、意識に上ることが決してあつてはならない。したがってその語は、「真の抑圧に襲われ」、〈無意識〉の中に追放される。

しかし、通常起ころような抑圧されたものの回帰があつてはならないことから「象徴を断片化した分割線が象徴を超えたところまで延長され、無意識的でそれと対称的な共象徴を型打ちしに、来るのでなければならぬ。」これによれば、埋葬室を生み出す分割は自我だけでなく、エスの領域にまで伸びていることになる。なお、後半部に登場する「共象徴」は普通使われない用語だが、先に登場した象徴の補完物と共同してなにかを意味することである。そして、〈無意識〉の中で形成されるその補完物は〈物〉(chose)と呼ばれる。現れてはならない *letet* は、〈物〉となつて、語へのフェティッシュムとしてのみ

現れることができるのである。

このフェティッシュ化の理解を支える一つの根拠が、先に行なった狼男の姉の自殺に関する考察であると推測される。この問題が論じられる頁に姉の自殺への言及はない。また、その解釈を提出した先の論文への言及もない。しかし、「語」が〈物〉として現れる現象の一例が、アブラハムとトロークとって、水銀としてのその語を飲み込んで「何も起こらなかったこと」にしようとした姉の自殺であったに違いない。

こうして、徹底的に語を対象とし、「言語標本」の作成を目指して進んだ分析を、他の論文で進んだ *crypte* の局所論に位置付ける作業が終わる。「言語標本」における *crypte* の位置づけは、本書が *crypte* の書であるという一見した印象と対照すると、意外に複雑である。その複雑さに、デリダの『弔鐘』^グが何らかの役割を果たしたのか、デリダの *crypte* 概念との照合の難しさがその使用を抑制的にしたのかと問うことができるかもしれないが、むしろアブラハムとトロークの理論構築における困難、今述べた繋ぎの困難がその位置づけを複雑にしていると思える。暫定的に考えておきたい。つまり、そもそもこの書を *crypte* の書にすることにあつた種の困難があつたと思われるのである。

ともかくこのようにして『言語標本』という、港道の言葉を借りれば、「かなり不均質な要素を含んでいる」⁶⁰「書の主部が

成立した。「主部」と呼ぶのは、全体の成立には、著者による「序章」が書かれ、デリダに序文の執筆が依頼され、長大な FORS が書かれることが必要だったからである。デリダの FORS の位置付け、両者の *crypte* 概念の異同、そして先に残しておいた、両者における「亡霊」の扱いについて考えることが次の課題である。しかし、その前に、『言語標本』の完成段階で加えられたと思われるあと一つの文章に触れておこう。

「WOLFMAN」の言語標本のさらに後に置かれるタイトルのない最終頁である。そこには、斜字体で、翻訳版で一五行の謎めいた言葉が綴られる。それは「彼の根底に」「われわれの奥底に」ある話^{パロール}についての言葉である。この作品を通じて狼男の埋葬語を暴いてきたことについての詩的表現と思える言葉が、著者を意味する「われわれ」を主語として、綴られたのち、最後に謎めいた言葉が続く。

・・・しかし享楽すべく、それらの語は黙したままである。
墓から、享楽する……それでもやはり！
彼だつたら、おお君、わが兄弟よ、君はどのように振る舞う
のだろう？

結論部で強調された通り、語は物であり、それが埋葬室という「墓」で黙し、享楽する、と一応読める。最後から二行目ま

では、である。しかしここで呼びかけられる、この世になく墓に住まう存在と読める「彼」は誰なのか。狼男と呼ばれてきたセルギウス・コンスタンチノビチ・パンケイエフはこの時点で存命である。とすれば、出版を待たずに亡くなったニコラ・アブラハムのことと思わざるを得ない。あらゆる言葉が「共著」として書かれているこの書の中で、この言葉だけは、マリア・トロークがアブラハムに投げかけた言葉として読むのが適切であろう。埋葬語 *cryptonym* について、埋葬室 *crypte* について論じてきたこの書は、アブラハムの死という現実——アブラハムとトロークが概念化するメタ心理学的概念としての〈現実〉ではなく、誰もが共有する現実——に直面した。「彼だつたら・・・」のように振る舞うのだから」という問いは、今後の検討につきまとい続けるだろう。

註

- (1) 本稿は、次の論考の続編であり、(1) 亡霊再訪、(2) アブラハムとトロークの埋葬室、そして(3) に始まる。森茂起「死者の声はどう届くのかー『埋葬と亡霊』その後(上)」『心の危機と臨床の知』甲南大学人間科学研究所、一七、二〇一六年、三一四〇頁。

- (2) ニコラ・アブラハムとマリア・トローク『狼男の言語標本埋葬

語法の精神分析』港道隆、森茂起、前田悠希、宮川貴美子訳、法政大学出版局、二〇〇六年。

- (3) 前稿では英語の *crypte* を用いたが、フランス語での議論を中心に扱う本稿では、フランス語の *crypte* を用いる。

- (4) ここに紹介する二事例は、筆者ではなく、他の治療者が経験した例である。治療者の判断を仰ぎ、個人情報報を大幅に抽象化して記載した。こうした歴史的な事象に関わるトラウマの場合、当事者が歴史の証言として公に語ることをしていない限り、具体的に記すことができない。匿名であっても事例の特殊性から個人を特定しうるからである。また、個人が公に語りたいと考えても、関係者や親族に影響が及ぶことを考え断念することがある。偶然あるいは何らかの努力で発掘されたとしても、それを社会で共有することを困難にし、深く接近不可能にさせるこうした事情自体が埋葬室が形成される理由の一部であろう。

- (5) ホロコーストについてその「表象不可能性」によって本質を捉えようとする試みがなされてきた。しかし、ホロコーストには様々な次元の個人的体験が含まれている。この体験は、極めて言葉にし難い体験でありながら、ある時点で言葉になり、孫に伝えられた。「罪悪感」を含む極度のトラウマであっても、何らかの表象にもたらされる可能性があることも否定できない。

- (6) 「外傷 (trauma)」の定義については前稿で扱った。

- (7) 知らなかった事実を人生のある時点で知るといふ出来事が、「腑

- に落ちる」ことによる問題の氷解ではなく、新たな衝撃となつてトラウマ性を帯びることがある。こうした例を扱うには、フロイトが提示した、トラウマにおける「事後性 *Nachträglichkeit*」の概念を、過去の体験ではなく、「一度も現前しなかつたもの」に拡張しなければならぬ。次の拙論を参照。森茂起「生を支える意志について—フェレンツイとドルトを参照して—」心の危機と臨床の知」甲南大学人間科学研究所紀要、二〇、二〇一九年、四三—五八頁。
- (8) 港道隆 *Postscriptum* 『狼男の言語標本』二八三頁。なお、この「後書き」のタイトルに、*crypte* の響きが含まれていることに注目しておきたい。
- (9) 同右、二八二頁。
- (10) 森茂起「解説」『狼男の言語標本』二四三—二七二頁。
- (11) 柴山雅俊 (2016) 「解離症」脳科学辞典。DOI: 10.14931/bst.7047
- (12) 解離性同一性障害患者の約八〜九割に性的虐待の既往があるとされる(前註)。ただ、日本における同患者には、性的虐待ではなく、家族内の「関係ストレス」を背景に持つことが多いという岡野の指摘にも注目しておきたい。岡野憲一郎「解離性障害—多重人格の理解と治療」二〇〇七年、岩崎学術出版社、『続 解離性障害—脳と身体からみたメカニズムと治療』二〇一一年、岩崎学術出版社。
- (13) 単回性の出来事が健忘をもたらす場合、出来事の後の状況の中で、その記憶を言語化する、体制化することを妨げる生活状況や人間関係があることが多いのではないかと思われる。つまり、出来事そのもののトラウマ性だけでなく、秘密にせざるを得ないその後の状況のために記憶への接近が持続的に困難になった結果、健忘に至るといふ場合である。ここにも、単回性と反復性および持続性を単純に二分できない事情がある。
- (14) 柴田朋「子どもの性虐待と人権 社会的ケア構築への視座」明石書店、二〇〇九年、二四頁。次の文献も参照。石川義之「親族による性的虐待—近親姦の実態と病理」ミネルヴァ書房、二〇〇四年。
- (15) 本論は、フランス語文献の新たな検証に基づく研究ではなく、日本語となった『狼男の言語標本』「表皮と核」を対象としている。アブラハムとトロークの仕事に関する論考はフランス語文献に多いため、その中にすでに論じられていること、あるいは当然参照しなければならぬ議論が存在するであろう。本来必要な参照を欠く本論は、アブラハムとトロークの仕事に関して、特に臨床の世界で言及されることの少ない日本において、筆者の専門性から可能な限り議論を加えることに何がしか価値があるという判断に基づいたものである。
- (16) *Haunology* の訳に関しては、前稿註(2)を参照。
- (17) *Postscriptum* 二七六—二八二頁。
- (18) 一九八〇年開催のデリダを囲む国際コロークでの発言。ピエール・

- マドール「文学における弔鐘 弔鐘の文学」『現代思想』（『デリダ読本』一九八二、一七七頁）。
- (19) ロジェ・ラポルトによる討論の記録。Postscriptum 二七八頁
- (20) 概観はすでに『表皮と核』の「訳者あとがき」においてなされているが、ここでは時系列を明確にしながら展開過程をたどることに重点を置く。
- (21) 『表皮と核』一五三頁。
- (22) 『表皮と核』はintjectionに「取り込み」という訳語を採用しているが、ここでは『精神分析事典』（岩崎学術出版社）等に従って「取り入れ」と表記する。
- (23) 『精神分析用語辞典』（みすず書房）『精神分析事典』をはじめとして、一般に、「体内化」は身体的境界の「外から内」への内化を意味し、身体的な基盤を持つ幼児期に始まり、いずれより広い現象を含む「取り入れ」に発展するメカニズムである。つまり両者は連続的にとらえられている。
- (24) 『表皮と核』一六一頁。
- (25) 英語ではphantasyないしfantasyに相当する。日本語文献では、「ファンタジー」と表記されることもあるものの、「幻想」あるいは「空想」の訳語が用いられている。フランス語文献の翻訳では「ファンタスム」と表記されることが多いようである。
- (26) 『表皮と核』一六二頁。
- (27) ある例に基づいて若干の改変を加えた。
- (28) 『表皮と核』二七二頁。なお、同書からの引用で鍵概念に添えられたフランス語は筆者による挿入。
- (29) トロークは、一九七六年公刊の『言語標本』の「序章 狼男との5年」の冒頭に、「5年……分析の平均的な継続期間である。われわれは5年を、狼男とともに過ごしたところだ」（5頁）と書いている。その分析の起点を「魔法の言葉」においた言葉であろう。しかし狼男を分析対象とする価値への気づきや、仕事の企画はもちろん発表前の時期に遡るはずなので、一九六九〜一九七〇年のいずれかの時点と思われる。
- (30) トロークは、この経緯を、『言語標本』序章の注において、次のように述べる。（一九六八年の論文の後「われわれの臨床―理論的探求の関心は、象徴操作が失敗し、取り入れが欠如し、リビドーとその象徴化の諸々の道具との出会いが欠けている症例に赴くことになる。」そしてその過程で、「保守的抑圧 refoulement conservateur」「現実局所構造」（topique réalitaire）「心内部的埋葬室」（crypte intrapsychique）「埋葬室内的同一化」（identification endocryptique）などの「新たな概念装置」が提出されたと記している。これからここで辿っていく過程である。『表皮と核』八九頁、注（2）。
- (31) 『表皮と核』二七八―二八五頁。
- (32) 同、二七八頁。
- (33) 『表皮と核』二七九頁。「」内の言い換えは訳者による。

- (34) 同、二八一頁。
- (35) この論全体に与えられた見出し。
- (36) 『表皮と核』二八二頁。
- (37) 同、二八三頁。
- (38) 経験の記憶に基づくホロコースト・サバイバーの証言を、新たな歴史学的調査と突き合わせて検証する、精神分析家と歴史家の共同研究が精神分析家、Andreas Hamburger のチームによって行われている。以下を参照。Laub, D. & Hamburger, A. (Eds.) (2017). *Psychoanalysis and Holocaust Testimony: Unwanted Memories of Social Trauma*. London: Routledge.
- (39) 『表皮と核』二八六三〇三頁。
- (40) 同、二八六頁。
- (41) シヤーンドル・フェレンツイ『精神分析への最後の貢献―フェレンツイ後期著作集』森茂起・大塚紳一郎・長野真奈訳、岩崎学術出版社、二〇〇七年、一四六頁。
- (42) 同、二九〇頁。
- (43) 同、二九一頁。原文ではこの引用箇所全体に強調符がつけられているが、その箇所のみ引用するため省略した。
- (44) 同、二九三頁。
- (45) 同、二九六―二九八頁。
- (46) 同、二九八頁。
- (47) Postscriptum 二九五―二九六頁、注(20)
- (48) 『表皮と核』三二九―三三三頁。
- (49) 同、三三一頁。
- (50) 『狼男の言語標本』六三頁。
- (51) 二人の仕事が、個人の詳細な人生史の中に病因としての外傷的事象、主として養育者との関係性の中にあるそれ、を見出そうとするフェレンツイへの関心を背景に進められたことを表す出来事である。出生前の個人史に視野を広げたのもフェレンツイであった。また、「攻撃者との同一化」の概念で、親の埋葬室（そのように名指されたわけではない）が子どもに転移する可能性に触れたのもフェレンツイだった。ただし、親の人生における外傷的出来事にフェレンツイが注目した例は筆者の知る限り存在しない。
- (52) もちろんデリダをよく知る人の目にその影響が見える可能性は残る。
- (53) 『表皮と核』一四八頁。
- (54) 『狼男の言語標本』一四八頁。
- (55) 港道は第四部を「アブラハムの手になる確率が高い」と記しているが、その根拠を示していない。内容の抽象度の高さからとも思われるが、今となつては確かめるべきがない。
- (56) 翻訳するとすれば同じ「狼男」となるこの WOLFMAN が、書物全体のタイトルと第一部で使われる L'Homme aux loups と異なること、また、それがドイツ語、英語それぞれの文献に登場する Wolfsman および Wolf-Man と異なる点については、Post-

投稿論文

scriptum, 299-300 を参照。

- (57) 『表皮と核』一五九頁。
- (58) 同、一六〇頁。
- (59) 同、一六一頁。
- (60) Postscriptum, 二八一頁。

(もり
しげゆき／臨床心理学)